

「名波研究会」は継承されていく

丁 貴 連

もう 20 年も前のことなのに、1991 年 2 月に行われた文学専攻（現総合文学）編入学面接試験の様子は未だにはっきりと覚えている。その日の私は極度に緊張していた。何しろ再度の挑戦であったからだ。名前を呼ばれて面接会場に入って席に座るや否や、いきなり六人の先生から矢継ぎ早に質問が飛んできた。その質問の量と質にたじろぎながらも、今度こそ！という気合で何とか切り抜けてはいたが、次第に厳しさを増して行く先生たちの追及に私はとうとう力尽きてしまった。最後の質問の意味がよく分からず、体中からいっせいに汗が噴出した。必死になって答えを探したが、考えれば考えるほど頭が真っ白になっていき、目の前の先生たちの顔が汗と涙でぼやけて見えた。もうだめだと思った瞬間、右端に座っていた白髪まじりの長髪の先生が「今の質問はですね」と、分かりやすく説明してくださったのだ。答えに窮して困り果てている私を見かねての配慮だったと思われるが、それに私がどれほど救われたかは言うまでもない。その長髪の先生が名波彰弘だということは入学して初めて知った。

念願かなって大学院に入学した私は、ある日先輩と遅めのお昼ごはんを食べに丸善書店近くにある「ランプ」というおしゃれなレストランに入った。すると、なんとそこに面接の時にフォローしてくださった、あの長髪の先生がコーヒーを飲みながら本を読んでいるではないか。ちょうどお昼休みが終わったばかりの店内には先生一人しかいなかった。先輩に、あそこでコーヒーを飲んでいらっしゃる先生に助けられて面接試験を無事終えることができたのだと話すと、あの方は平家物語が専門の名波先生で、この店の隠れ常連でもあるのよ、と教えてくれた。読書にふけている先生のお姿にコーヒーショップの隠れ常連だという言葉が重なり、なんともいえない親しさを覚えた。こんな先生の下で研究ができれば、とひそかに思った。

しかし、その夢はかなわなかった。修士論文執筆以来比較文学を専門にしていた私は、当然近世文学を専門とする先生の授業よりも、近代文学や比較文学、あるいは英米文学の授業を優先せざるを得なかった。それゆえ大学で先生に接する機会はほとんどなかった。でも、私はひそかに先生に会っていた。実は、たまにこっそり「ランプ」に行っていたのだ。めったに出くわすことはなかったが、コーヒーカップを前に読書を楽しんでいる先生のお姿をガラス越しに見ることは私の何よりの楽しみだった。このような生活が 3 年ほど続いたが、やがてわざわざ「ランプ」に行

かなくても毎週先生に会えるチャンスが訪れた。

というのも、先生が私たち留学生のために研究会を立ち上げてくださったのだ。当時の文学専攻は留学生全盛期といっても過言でもないくらい多くの留学生が学んでいた。韓国や中国、台湾から来日していた彼らのほとんどは日本文学、とりわけ近代文学を専攻していたが、近代文学を専門にする先生方の相次ぐ退官などによって近代文学関連の授業が少なく、留学生の間に不安と戸惑いが広がっていた。そんな私たちの不安を察したのか、先生は近代文学の斉藤愛氏や近世文学を専門にしながらも日本文学全般にわたって造詣の深い内田康氏、そして入学したばかりの中根隆行氏、波瀾剛氏、日比嘉高氏ら日本人学生に呼びかけて、いわゆる「勉強会」を開いてくれたのだ。1995年4月のことである。

以後、この勉強会は夏休みと春休みを除く毎週月曜日の午後5時に欠かさず開かれた。正規の授業ではない勉強会に4、5時間を割かねばならないというかなりハードなスケジュールではあったが、欠席者もほとんどなく、毎回の出席者も20人前後という盛況ぶりであった。勉強会という当初の名前はいつしか「名波研究会」に変わって、私たちの発表も議論も会を重ねていくにつれて充実していった。実は、この研究会によって博士論文を構想し執筆し、学位を授与された最初の者が私なのである。その後、李征氏、李貞熙氏、日比氏、鄭柄浩氏、中根氏、洪善英氏、波瀾氏、李志燭氏らが次々と学位をとって中国や韓国、日本、台湾へと羽ばたいていったが、最初の学位授与者に私を育ててくれたのが名波先生と名波研究会だということはいくら強調してもし過ぎることはないと思う。

名波研究会が発足した当時、私は論文執筆に行き詰まっていた。修士論文のやり方をそのまま踏襲した研究は、後輩たちからことごとく批判されることになった。プライドはずたずたに傷つけられ、私は次第に追い込まれていった。しかし、何をどう改善すればよいのか、まったく見当がつかず悶々とした日々を送っていた。そんなある日、私は先生の研究室に呼ばれて次のような話を聞かされた。

韓国の近代文学者が国木田独歩の影響を受けたことはこれまでの丁さんの研究論文によってより一層明らかにされた。この業績は日韓両学会で高く評価されてしかるべきであろう。しかしながら、これからの研究は単に影響を受けたとか受けなかったとかという次元ではなく、影響を受けたとするならばその理由や背景、意図などについて論じなければならない。とりわけ日韓の間には植民地支配という不幸な歴史が横たわっている。韓国の若き文学者たちが支配者側の文学と知りつつも、その影響を受けねばならなかった事情を、苦悩を、痛みを汲み取らなければならない。今の丁さんの論文には当時の彼らの気持ちを

分かろうとする姿勢がはなはだ欠けている。

まさに目から鱗の落ちる指摘であった。当時の私は、日本の近代文学を翻案したり模倣したりする韓国の初期近代文学者を、さらには韓国近代文学そのものをどこか見下していた。それを先生に見事に見透かされていたのである。研究方法の全面的な修正を迫られてひどく戸惑ったが、これまでのやり方を改めない限り博士論文の完成は無理だということは火を見るより明らかだった。だから先生がわざわざ私を呼び出してくださったことは本当に嬉しかった。先生の指摘からヒントをつかんだ私は、早速韓国近代文学を読み直すと同時に、政治学や歴史学、社会学関連の資料を手当たり次第に読み出した。その作業はかなり大変だったが、その過程の中で「余計者と国家―国木田独歩『号外』と金史良『留置場であった男』」という論文を書き上げた。これはそれまでの単なる影響関係論から抜け出して、韓国近代文学の起源に独歩文学が深くかかわっていたという事実をはじめて提示したものである。先生の反応は予想以上だった。嬉しそうに論文を捲りながら「これは面白い、実に面白い」と、おっしゃっていたことを私は今でもはっきりと思い出すことができる。

こうして自信を取り戻した私は次から次へと論文を書き、名波研究会で発表した。それらをまとめて博士論文として提出したのが1996年である。研究会が始まってから2年目のことである。手前味噌になるが、論文は高く評価された。とりわけ、名波研究会に支えられて執筆した第二部への評価は高く、主査の荒木正純先生は第一部から第二部に発展させていった私の能力とセンスを高く評価してくださった。その能力とセンスを磨いてくれたのがほかでもない、名波研究会なのである。もしあの時、名波研究会が発足されなかったらと思うと、背筋が寒くなる思いである。

このように書くと、名波先生の思い出は研究会のことしかないように思われるかもしれないが、実は、そうではない。「ランプ」の隠れ常連であった先生は、ロマンチストという一面も持っていた。たとえば、韓国の高麗大学の集中講義にいらしかった時、たまたま帰省していた私と李貞熙氏を誘って両班（士大夫）の村として知られる河回村に旅行に出かけたこと、学会に行くと必ず近くの素敵なバーにつれて行ってカクテルをご馳走してくれたこと、お正月には留学生をご自宅に招いて奥様手作りのおせち料理をご馳走してくれたこと、カラオケでは必ず「五番街のマリー」を歌っていたことなどなど、懐かしい思い出は次から次へと浮かんでくる。こんな先生に私は、「粹」を感じた。しかし、先生は、粹でダンディでありながら実はしたたかな教育者であった、これが先生の本質である。

筑波を離れて早十年、右も左も知らずに飛び込んだ宇都宮大学での教員生活にもようやく慣れてきた。名波研究会をお手本にして始めた丁研究会は、いまや15人の

修士を出すまでになった。博士輩出までには今しばらく時間がかかりそうだが、私は宇都宮の地で私なりに名波研究会を継承していくつもりである。